

東京都渋谷公園通りギャラリー

交流プログラム 「渋谷ラジオ」

令和6年度番組 「展覧会のあと」

ゲスト5：米田昌功さんをお招きした回のうち、#23のテキストです。

○河原 じゃあちょっと、今後のココペリさんの展望とか、そういうことも伺えたら。活動の展開とかってあるんですか。

○米田 そうですね、やっぱりいろんな方が障害のある方のアートというのに関心を持ってくださっていて、それがもう本当、ここ数年で一気にならってきたような印象を受けるんですね。特にこういう地域だと、それをすごく実感するというか。これまでは美術に関心のある方だったりとか、福祉関係の方だったりとか、展覧会とかそういう場での盛り上がりというのは実感できたんだけど、今は企業だったりとかそういうところで、作品の利用みたいなようなことをお声掛けくださるようなところも本当に増えてきていて、そういう活躍の場が増えていくというのはすごくありがたくて、これが1つきっかけとなって、いろんな方にもチャンスが巡ってくればいいなというのは思うところなんですけれども、やっぱり最初の原点といいますか、創作の場ですよ。結局、描いている本人たちって、自分の描いた絵が展示されたとか、グッズになって誰かが買ってくれたとか、そういうところじゃなくて、やっぱり描いているときが一番楽しいといいますか、そういう感覚というのを大事にして、できる限り、彼らも年を取っていくし、その年齢とか家庭環境に応じてちゃんと創作の場が提供できるように工夫して、継続できるようにしていきたいというのがココペリのところで、それが基本にあって、世に出ていくのは、もうどれだけでも、皆さん利用してくださいっていう感じで。(笑) というのが、本当にそんな感じですね。

展覧会としてはやっぱりいろんな機会が、これまでココペリって手弁当でやっていたんですよ、展覧会とか。高岡市もすごく普及事業助成金みたいな形で少し予算をつくってくださって、それで毎年展覧会を続けていけたりとか、展覧会というやり方を今変えて、高岡市内にいる作家さんを映像でアーカイブして、市に残していくというような取組に変えて、やっぱりその時代に応じて、今、周知の時期というのがある程度落ち着いたので、今度はそれをどう残していくかという方向で。あとは、自分たちで主催、企画していた展覧会というのを、企業とか財団だったりとかそういうところとの連携で、自分のところのNPOとかセンターの負担をなるべく少なくして、より成果が上がるような内容の展覧会に

ちょっと移行していくというようなところを今意識してやっているところですね。

今までは、そういう意味でトランク・プロジェクトとかいろんなことをやっていたんですけど、今はもうむしろ、主催でやるので協力してくださいというような形で展覧会をやるのが本当に増えてきているので、本当に助かっています、これは。(笑) 本当に助かっています。

○河原 (笑) すごいな。それで、ずっとやってきた活動のある種の種まきというか。

○米田 そうですね。

○河原 ココペリが練り歩いたみたいな形で芽がどんどん出てきて、だんだん今の活動の地盤がしっかり整った、土壌が整ったみたいなものもあるのかもしれないですね。

○米田 そうですね。ありがたいです。そういう意味では、いわゆるココペリだけが目立とうとかがっているのはあんまりやらずに、何かココペリにチャンスが巡ってきたときも、ほかの今アートを頑張ろうってしているところに、福祉事業所に回したりとか、やっぱりそういうふうに来てきたことも、今、少し何か形になってきているというか。まあ、本当に、でも直近は、今年はまだもう3つぐらい展覧会が入っているんですよ。(笑)

○河原 えー、それは忙しいですね。(笑)

○米田 忙しいです。

○河原 今年のいつぐらいなんですか。

○米田 5月に、これは地元の北陸銀行が持っている美術館で毎年定期的にするようになって、そこで県内のいろんな作家さんを紹介するという展覧会を。これはさっき言った持込み展だったりとか、そういうようなアーカイブが功を奏して、毎年いろんな人をそこで紹介していくという。そこで、持込み展で初めて人に見せたというような人にも、発表の場をどんどん回していくというようなことをやっていって。

○河原 なるほど。

○米田 それで、8月に、今度は県内の県民会館美術館というところで、その運営をしている財団さんの主催で、アール・ブリュットの展覧会というのを去年から始めたんですよ。

○河原 ふーん。

○米田 これはもうちょっと、今言った銀行の、そこはギャラリーとしては小さいんで、紹介するっていう形なんだけど、県民会館美術館は本当に美術館なんで、テーマをはっきりとさせて企画展をやっていくという。去年は3人の県内で活躍している、もう本当にブ

ームになる前からずっとやっていた人というのがやっぱりひっそりとおられまして、そういう人を紹介するという、3人を紹介する。おじいちゃんばかり。

○河原 おじいちゃんばかり。

○米田 うん。それで、今年は、企業とアートと福祉のコラボというものの可能性だったりとか、そういうことに取り組んでいる事業所とか、ココペリも含めてそういうところの作品を紹介して、そういう実例とかも、コラボしてグッズを作ったりとか、そういうところもやる。それは、県が障害者の賃金向上というテーマの中で、障害者アートというのをしっかりと位置づけられたんですよ。

○河原 うんうん。

○米田 そういうのもあって、そこら辺を県内の企業とか、障害者アートの存在とか、県外でこういうような実践例があるというのを周知することで、みんなちょっと一歩踏み出してくれたらと、企業とかが。という期待を込めてやる展覧会。

○河原 重要な8月。

○米田 そうですね。それで、10月は伏木の。

○河原 ああ、さっき伺った。町なかでやるってイメージになるんですかね。

○米田 町なかと、あと文化財ですね。文化財を会場にして3か所。勝興寺っていう国宝と、あと稼働はしていないんですけど、日本で一番古い測候所があるんですよ。大正に造られた建物がまだ残っているところがあって。

○河原 へー。

○米田 そこと、北前船の、昔の残っている庄屋の家がある。その3か所を中心として、町なかを使って、さっき言ったトランク・プロジェクトも使って、いろんなところでその期間は展示してもらって、コロナとか地震とかで中止になっていた、いわゆる秋にやるいろんなお祭りイベントみたいなようなものを、その会期に重ねてやってもらうことで、にぎわいをつくろうかというのが。

○河原 なるほど、芸術祭みたいな感じになりますよね。

○米田 そうですね。

○河原 その中心にココペリさんの作品とか、結構これまで関わってきた作家たちの作品が出ていくと。

○米田 そうです、そうです。

○河原 すごい、なかなかこれまで結構蓄積してきたいろんな経験値のある作家と、また、

持込み展みたいな新規作家の発掘と発信みたいなのが並行的にされているんで。結構、比較的見たことあるかもっていう作家が、都市圏の展示だと多分多くなっちゃう。

○米田 はいはい。

○河原 自分たちでもそうになってきちゃうんですけど。

○米田 ジレンマですよ、あれ。そうなりますよね。

○河原 発掘が難しいのを、多分すごくどんどん進めていってくださっているという感じがあるので、これ、要チェックですね。(笑)

○米田 (笑) 本当に、伏木の展覧会とかだったら、これまでは自分の作品を知ってもらってうれしいという発表の仕方だったんだけど、何か誰かの役に立つというようなところでの展示ということで、多分ご家族も、分かる人だったら本人も、作品が役に立つというような、そういう受け取りというのも1つ、ワンステップ進んだ感じがあって、被災した障害者アートを元気づけるとかそんなんじゃないで、その人も一緒に元気に、逆にいろんな人を癒やすとか、そういうふうな作品発表が行われるというのはすごく素敵なことだと思うので、それに地元の商工会とかが共鳴してくれたというのはすごくうれしいことですよ。

○河原 盛りだくさんというか、忙しい。(笑)

○米田 忙しいんですよ。(笑)

○河原 今後も、ずっと忙しかったと思うんですけど、より忙しいんだという。

○米田 忙しいんですよ。でも、こういうのもやっぱりずっと続けてきて、ボランティアの方のリピーターがすごく多いんで、それが本当に助かっているんですよ。

○河原 おお、そこもすごい。

○米田 それがないと、多分1個も実現できていないものばかりなんで。

○河原 やっぱりその方々にとってもやりがいがあったり楽しいんでしょうね。じゃないと繰り返し来ないし、そういう場づくり、場にもなっているということですね。

○米田 皆さん面白いって言ってくれるんで、これが、毎回同じ展覧会をしていたら多分そうならないと思うんですけど、一回一回全部変えているので、内容も、アプローチも変えた展覧会で、場所も全部変わっているんで、そういう点では、もしかしたらボランティアの人が飽きない。(笑)

○河原 (笑) 確かに。次はここだ、次はここだって。

○米田 (笑) になっているのかもしれないと思っております。

- 河原 すごいな。自然にそうになっていたみたい。(笑)
- 米田 そうそうそう。(笑)
- 河原 なるほど。それも、でもテクニックがすごい。
- 米田 あとは、これ手前みそなんですけど、追加情報なんですけど、去年とかもう一歩ちょっと、一歩踏み込んだところに入って行って、テレビ局と一緒に展覧会、アートイベントをつくったんです、去年11月に。
- 河原 へー。
- 米田 テレビ局主催で、ココペリが、「ばーと◎とやま」として参加したんですけど、もちろん作品展示はするんです。あとはシンポジウムもやって、最後に何をやったかという、ディスコをやったんです。
- 河原 ディスコ。
- 米田 ディスコ。(笑)
- 河原 ディスコって、あのディスコですか。(笑)
- 米田 ディスコです。
- 河原 (笑) 何でディスコに。
- 米田 身体表現とか、そういうものがみんな好きで、ダウンの人もみんな好きで、表現としてみんな好きで、やりたがっているというのは分かる。音楽とかでも、楽器とかだとスキルアップが絶対必要じゃないですか。だけど、ダンスって、特にコンテンポラリーダンスとかって、障害者アートのこれの評価と一緒に、スキルとか知識とかは関係なくて、その人だけのダンスができれば褒められるみたいな世界があって、これはちょっと親和性が高いなということで、おとしぐらいからダンスのワークショップというのを続けていたんですよ。
- 河原 へー。
- 米田 これをもう一歩やりたいと思って、さっき言った東海・北陸ブロックとかと協力して、東海・北陸ブロックというものの主催で、そういう身体表現に関わる人材研修みたいなようなことを、年間通して富山でやったんですよ。それって、発表者を研修するんじゃなくて、文化ホール側の職員を研修するというやつをやったんですよ。
- 河原 えー。
- 米田 それで結構火がついたというか。
- 河原 うんうんうん。

○米田 ダンス関係者もたまたま来ていた人とかがいたりとか、「何だ、これ。この世界は」っていうことで盛り上がったとかして、その中で一番私もやりたいなと思っていたのがディスコだったんですよ。

○河原 おお。(笑)

○米田 美術とは違うアプローチができる。ダンスだと。ダンスの研修とか、そういう人材育成とかというと、今までって全部発表者だったんですよ。ステージに上がる人たちの育成みたいなことを一生懸命頑張っていて、それだと、結局、アール・ブリュットと違って、一部の人が注目されて、ある程度成就感を味わっていくみたいな世界になっていくんで、そうじゃないのは何だろうっていったら、岐阜で少し昔からやっていたんですけど、岐阜の一部の文化施設が「みんなのディスコ」っていうのをやっていたんですよ。

○河原 やっていたんですか。

○米田 それで、ディスコだと思って、その人を呼んで話をしてもらったら、やっぱりこれで間違いないということになりまして、それをチューリップテレビの人に。チューリップテレビの人もそれにすごく感銘を受けて、「これ、やりましょう」ということになって、当日誰が何人来るかも全然分からなかったんですよ、もう。

○河原 (笑) なるほど。

○米田 平場になる文化ホールだったので、新しくできた。座席の半分を平場にして、半分はシンポジウム用に残して、ステージの側は。それで、こっち側にDJに来てもらって、やることになっていたんですけど、シンポジウム自体は100人ぐらい集まっていたんです。

○河原 おお、しっかり。

○米田 午前中から午後までシンポジウムをやっていて、午後3時から1時間だけディスコというやつをやったんですけど、250人集まったんですよ。(笑)

○河原 えー。(笑) すごくいっぱい来ている。

○米田 すごくいっぱい来たんですよ。障害のある子を指導しているダンスチームの人たちだったりとか、あるいは車椅子の、別にポイントを絞って周知もしていないんだけど、ディスコというものがどういうものか味わったことがない人たち、ディスコって何だろうっていう、踊るところらしいんだけど、どんなところか見てみたいというような車椅子の人だったりとか、そういう人たちが集まってきて。

○河原 なるほど、行きやすい場になっていたということですね。

○米田 そう。何もしなくてもいいですよという宣伝の仕方をしたんですよ。そこにいる

だけでいいっていう。

○河原 そこにいるだけでいい。(笑)

○米田 そう。そこにいるだけでいい。(笑)

○河原 いいな。

○米田 だから、発表の身体表現だと、絶対に何かやらなきゃならない。

○河原 そうですね。その間口は限られてきますよね。

○米田 そう。やっぱりそれをハードルを下げて、いろんな人が表現というものの楽しさを知るとするのは「あっ、ディスコがいいや」といって。ココペリの人たちも参加していたんですけど、もう家族も見つたことのないような激しい踊りを自然に発散したりとか、そういうことがあって、やっぱり美術の表現とはまた違う表現で、美術というのはやっぱり個の取組なんだけれども、ディスコって何か周りの人も訳分からず、わーっとかって楽しんで、遊んでいるというのが感じながら踊れたというので、また違う感覚を持ってですね。

○河原 確かに。

○米田 むっちゃ楽しくてですね、それが。(笑)

○河原 (笑) これは、何か続けていく。

○米田 続けます、続けます。さっき言った県民会館美術館のギャラリーの一角をディスコの場所にしようと思って、今。(笑)

○河原 (笑) まさにディスコにちょっとはまっているというか。

○米田 今、担当の人が困っているんですよ。どうやって、今、説明しよう、プレゼンしようと思って、その中で。財団の中で。

○河原 (笑) そうですよ。確かに。内側での説明が、一番イメージがつきにくいかもしれないですね。

○米田 そうそうそう。そうなんですよ。

○河原 (笑) でも、そういう、まさにミュージアムというか美術館施設も、ディスコ的な空間といいますか、そういう通常ないようなものっていうので、いろんな人が来やすい場面をどんどんつくっていくというのは、何かそういう議論も海外とかだとよく聞くんですけど。

○米田 なるほど。

○河原 そういうのを日本でもね、そういう場が。何か「そこにいるだけでいい」というキーワードが非常に、すごく好きで。(笑)

- 米田 (笑)
- 河原 すごくいい場所だなと。
- 米田 踊れなくても、本当に脳性麻痺の人が指一本動かしているだけでも……
- 河原 一緒になっていますよね。
- 米田 踊りなんだというような捉え方が、それまでやってきたワークショップで、コンテナポラリーの先生がよく言っていたんですよ。だから、「ああ、本当にみんなが参加できる世界って、ダンスでつくれるんやな」というのがあって。
- 河原 音と光と空間性がディスコにはあると思うんですけど、いろんな状態で。
- 米田 そのときはね、やっぱり作品の映像をどんどん映して。
- 河原 あっ、何ていうんですしたっけ。ビデオDJみたいな。
- 米田 そうそう。それはね、チューリップテレビの人がお手の物なので、それを作ってくれて。
- 河原 すごい。プロの映像。切り替えをぼちぼちぼちぼちと。
- 米田 そうそうそう。
- 河原 すごいな。
- 米田 それで、やってくれて、何かそういうことでまた1つ、美術的な平面絵画とかそういうものの広がりや、人との交流の場というものが、ディスコというもので1つ融合する場ができたんで、それがむっちゃ面白くて。
- 河原 すごいな。
- 米田 だから、そういうのがあると、より展覧会とかも、もっとマニアックにやってもいいのかなとって、ちょっと安心できるというか。(笑)
- 河原 確かに。そうですね。選択肢の話じゃないですけど、こういう振り切ったディスコもあって、ちょっと静かな、1点ぽんみたいなものもあったり、いろんなのが混在していることで、何かそれぞれが立ってくるというか。面白いな。すごい。
- 米田 そうなのって、やっぱり企業との主催とかそういうことがあって、初めて発見できたことなので。
- 河原 確かに、美術のところだけとか、福祉のところだけとなっていると、そういうアイデアなり、空間の規模感とかも全然限られてきますもんね。
- 米田 そうそうそう。アイデアが出てきたとしても、やっぱり規模感というのがやっぱり限られてくるんで。そのときに、やっぱり最初、チューリップテレビの人もすごくびっ

くりしていて、250人が集まって、本当に。急に人が増えて。(笑)

○河原 (笑) そうですよね。それまでのシンポジウムにいらっしゃっているのも、結構しっかり入ったシンポジウムですよね。その倍以上来たっていう。(笑)

○米田 そうそうそう。(笑) みんなびっくり。

○河原 しかも、何かよく分からないディスコのイベントですもんね。

○米田 そうです、そうです。

○河原 不思議なものですよ。多分、急に始まったものというか。

○米田 富山の特異性です。ちょっと違う道を歩んでいるぞと、ほかと。(笑)

○河原 (笑) 何かそれを逆にまた誰か違う……

○米田 そうそうそう。

○河原 昔の米田さんみたいな人が見に来て、「おお、いいぞ、いいぞ」って自分のところに持って帰るみたいなことが起きてきているのかもしれないですね、実はじわじわと。見えないところで。(笑)

○米田 テレビ局は、もう富山県内のいろんなところでディスコを仕掛けようとしているんですよ。

○河原 (笑) すごい。はまっている。

○米田 そう。本当にテレビ局としても、こんなすごい空間になるとは思わなかったという、よく分からない感動が押し寄せたといって。障害のあるなしにかかわらず、みんな踊っているんですよ。

○河原 何かそういうボーダーみたいなのが取っ払われる感じっていうのが。

○米田 そうそうそう。それがこんな簡単に取っ払われる。何か障害あるなしにかかわらずって、結構キャッチみたいにしてずっと使って展覧会をやってきているんだけど、「いや、こんなことでいけるんだね」というのがすごく実感できて。一応、センターとしては、芸術分野は全部対象となっているので。

○河原 なるほど、なるほど。身体表現も含め、音楽も含め。

○米田 ココペリはまあ、皆さんが描いている、表現している平面絵画とか、そういうのが中心になっていくんですけど、だから両方あることで、何かすごい、また新しい展開が生まれそうな気がしていて、楽しみなんです。

○河原 ありがとうございます。

○米田 すみません、長々と。最後まで。

○河原 今後の展望というか、決まっているすごいプロジェクトの話をお伺いできてよかったです。(笑)

○米田 もしかしたらディスコばかりになっているかもしれないですよ。(笑)

○河原 確かに。ココペリ with ディスコみたいな。

○米田 「結局、ディスコか」みたいなことになりましたけど、最後にやりたいのは。(笑)

○河原 最後にディスコの話になって。(笑) 目指すところはディスコだったみたいな。でも、それだけじゃないんですけど。

○米田 (笑)

○河原 さて、まだまだお話を伺いたいところですが、そろそろ終了の時間が迫ってまいりました。

それでは、本日の収録の感想を米田さんに伺いたいんですが、どうでしたかね。結構いっぱい、いろいろ質問しちゃったりしましたけど。

○米田 いやいや、何かもうすごく有意義な時間でした。昨日、ご迷惑をかけないようにと書いていろいろまとめていたのを、朝忘れてしまって。(笑)

○河原 (笑)

○米田 それが逆に功を奏したのか、何かその場で深めたいことを深めていくような話の流れだったんで、私もすごく面白かったし、何か整理ができました、今。(笑)

○河原 本当ですか。あっ、すごい。

○米田 いろいろと自分の考えとか、今後も「そうか、ディスコ一本で行くべきなんだ」と書いていうところに。(笑)

○河原 いやいやいや。(笑)

○米田 それは違うか。(笑) それは違います。

○河原 それも選択肢の1つとして。

○米田 (笑) そうですね。

○河原 ありがとうございます。短い時間でしたが、今日は、特定非営利活動法人障害者アート支援工房ココペリ代表の米田昌功さんにお話を伺いました。

展覧会を軸に振り返りつつ、米田さんの活動やお考えを伺うことができ、とても貴重な機会となりました。

ココペリの由来である精霊のお話とかを最後に伺ったんですけど、まさにココペリがや

ってきた活動がそういう種をまいて行って、芽が出てきて、1つは展覧会、イベント、ワークショップ、それで、まあディスコがあったり。

○米田 (笑)

○河原 そういういろんな人が出会う場をどんどんつくって行って、そこに人が流れてきて、ある種、豊穰の神ココペリをまず想起させるような場づくりというのを、すごく精力的にされているというのを改めて直接伺うことができたので、大変勉強になりました。

○米田 いや、こちらこそです。ありがとうございます。

○河原 ありがとうございます。それでは、これにて米田昌功さんの回を終了いたします。

本日はどうもありがとうございました。

○米田 ありがとうございました。

—了—